

千早赤坂生まれの「悪党」

増山雄三

神戸に住む人なら、JR神戸駅から歩いて約十分の所にある、湊川神社の主祭神が、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて活躍した武将で、明治以降は「大楠公」と称された、「楠木正成（一二九四～一三三六）」であることはよく知っている。

正成は、一三三一年から三年にかけ起った「元弘の乱」で、南朝側の後醍醐天皇を奉じた、大塔宮護良親王と連携して、「千早城の戦い」で、大規模な幕軍を千早城に引き付けて、日本全土で反乱を誘発させることで、鎌倉幕府の打倒に貢献した。

彼は、これほどの武将でありながら、出自や前歴は殆ど分っておらず、ただ確実なことは、河内や和泉を本拠地とする「悪党」だったということで、ここは商業の発達していた

地域だったので、こうした社会環境や経済環境から生まれた、反体制の新興武士だった。そして、その多くは野伏やあぶれ者で、幕府から見れば、まさしく彼らは悪党で、こうした勢力と結びついていた彼は、河内の地における、一土豪にすぎなかった。

そんな悪党と、後醍醐天皇が結び付いた経緯というのは、武士は強ければ、文盲でも恥ではなかった時代、正成の様な無名の家系ながら、父が学問への理解があり裕福だったので、彼がまだ少年のころ学問を学ぶため、今の大阪府河内長野市にあった「観心寺」に入り、読み書きと「朱子学」を学んだ。

朱子学と言うのは、後醍醐天皇の行動原理ともいえる学問であり、観心寺は後醍醐天皇の大覚寺統の系列で、たまたま天皇の近臣がここで楠木正成と出会い、彼の非凡さを知って、後醍醐天皇に推挙したのだ。

この時期、後醍醐天皇の最大の悩みは、自分の理想を実現させるには、彼を支えるべき

軍事力がない事だったので、反幕府側と分る者に諭旨をだした上、助力させねばならなかった。なので、正成のような悪党を利用しようとしたのは、必然の成り行きで、その後、正成は居城の赤坂城で、後醍醐天皇は笠置山で、新しい政府の旗上げをするのである。

こんな楠木正成は、戦前では後醍醐天皇の「忠臣」として顕彰され、戦後には「悪党」すなわち、幕府の荘園領主などの支配体制に抗した、反逆のヒーローであると喝采を浴びたが、彼を悪党とした、NHKの番組が抗議を受けるなどしたため、いま世間的なイメージは、まだ定まったとはいえない。

先に話したように、現在の大阪府東部である、河内の土豪だった彼の前半生は「謎」が多いが、後醍醐に召されると、たちまち軍事的才能を発揮して、鎌倉幕府軍を翻弄し、足利尊氏の大軍にも怯まず、そこで潔く自刃して果てた、と記している軍記物「太平記」の正成像が、今では深く浸透している。

この謎の部分について、文化史家の林屋辰三郎は、正成は「散所の長者」ではなかったかと推察しているが、散所というのは、耕作に適さない河原などの土地で、領主の警護や交通運輸業務などの雑役を行ない、商業的な権利を得ていた者達の事をいった。

既存の秩序を壊す、悪党的な性格を積極的に評価したのは、中世日本史が専門の網野善彦で、彼は、著書「悪党と海賊」の中で、商業や金融により利を得る行為も、また「悪」とされたと指摘するが、正成は、流通と関わる武士だったとも言っている。

そして、戦闘になれば大石や大木を投げ落とす、石ツブテを投げるといって、東国武士とは全く違った、ゲリラ的戦法をとったのも、まさに非正規の武士である悪党らしいが、古くからある政治や経済の体制に反抗した、アウトロ－的集団こそ悪党であり、戦後史学会は、彼らを変革の主体として持ち上げた。

近年、進展をみたのが正成の出自について

の研究で、太平記では、橘諸兄の流れをくむ橘氏とされたが、これには疑問があり、楠木のルーツの地は、駿河の荘園で今の静岡県清水区である、入江荘内の楠木村だという。そこで、幕府内で専制を強めていた、北条氏惣領家の配下だったというが、楠木氏は、東国から畿内の河内にやってきた、鎌倉の軍事力とされ、そんな事もあり、正成自身は、河内の千早赤坂で誕生したと見られる。

江戸時代初期に、林羅山が編述した「鎌倉將軍家譜」によれば、正成は後醍醐に召される九年前、得宗北条高時の命で、摂津の山本右衛門尉や紀州の安田庄司、それに、大和の越智四郎を討伐している。

それで、「後醍醐のために戦った忠臣」という先入観からこれまで否定される傾向が強かったが、やはり正成は鎌倉幕府関係者だったのだろう」と話すのが、日本中世史が専門の生駒花園大教授だ。

御家人だった、足利尊氏や新田義貞も幕府

を裏切って、後醍醐に仕えたので、正成が同じ道を進んでもおかしくないが、正成が、それですっと悪党だったとは考えにくい。そして彼は、朝廷と幕府の両政権に関りながら、交通や流通に関与し、時には荘園領主と対立したため、悪党と非難された人物だった。だが、このような多面的な面を持っていたからこそ、正成は後醍醐とも結びついたのだ。その後、後醍醐に反旗を翻した、逆賊といわれた尊氏と戦うが、尊氏への共感は失わなかったように、尊氏寄りの軍記物「梅松論」では、「帝には徳がないので、尊氏がいなければ、この政権に皆はついてこない」と、新田義貞を斬り、尊氏と和睦すべしと提案した」と記されている、現実主義者だった。ところで、源氏の嫡流を自負し、天下取りは代々の悲願としていた足利尊氏は、建武政権で重用されたのに、どうして後醍醐天皇と決別したのかといえれば、それは、尊氏の個性が「八方美人で投げ出しや屋」だということ

によると、中世史に詳しい歴史家はいう。

尊氏は、北条氏残党による「中先代の乱」を鎮圧し、鎌倉を占拠したあと、後醍醐の帰京命令を無視して、家臣に恩賞の給与を始め、それが、それはまさに、彼の「八方美人」らしいところだが、これが後醍醐の逆鱗に触れると、「投げ出し屋」の本領を發揮して、蟄居してしまふのだ。

すると、後醍醐から追討軍を差し向けられたので、尊氏はそれと嫌々戦うが、それも、支離滅裂な離反の結果だという後の史家もいるが、そんな出来事を知ると、尊氏は、あまり深い考えを持たない、「能天気」な人物だったという印象を与える。

そんなチャランポランな尊氏が、色んな経緯を経ながら、混迷の時代を纏め、当時をリードする、キャスティングボードを握ってしまふというのも、この時代の面白いところではないかと思える。

令和三年四月